第十二章　施しの波羅蜜：①「さいしょ～施しの区別」（P190 さいしょ～P192 の 9 行目）　2018/7/12(木)：担当　丸山

==========

今回のアジェンダは以下のとおり。

① はじめに：

② 参考資料：

③ 原文と語義・コメント等：

==========

① はじめに：「私たちは、今、どこにいるのか？」・・・まずは、声に出して読みたい！『タルゲンの摂義（サマリー）』

（※）「翻訳者ノート（16）より

因は仏性如来蔵（ぶっしょうにょらいぞう）（第一章）　依処は人身最勝宝（えしょ　にんしんさいしょうほう）（第二章）

縁は尊き善知識（ぜんちしき）（第三章）　方便彼の口訣（かれ　くけつ）にて（第四～第十九章）　ここの途中！

果なるは無上正等覚（むじょうしょうとうがく）（第二十章）　事業は無別の清度（じごう）なり（第二十一章）

如来蔵はなににせよあるわけだし（第一章）、今回は人間に生まれているわけだし（第二章）、
さらに私たちは正しい師に出会えているわけです。（第三章）
それなのに、一向に悟りが開けそうにないのはどうしたことでしょう。
それは「不得仏の四障」というものがあるからだと書かれています。　（以上、翻訳者ノート 37 より引用）

「不得仏の四障」

対治！

「不得仏の四障」を除去する 善知識の口訣

① 今生での活動領域に執着すること ← ① 無常の修習（第四章）

② 有の安楽に執着すること ← ② 輪廻の禍い（第五章）および 業と果の修習（第六章）

「六波羅蜜」は ここ！

③ 寂静の安楽に執着すること ← ③ 慈愛と悲心の修習（第七章）

④ 仏を成就する方便を知らないこと ← ④ 最上の正覚へ発心する諸法（第八～十九章）
- 1）帰依
- 2）二無我を修習する
- 3）五道について学ぶ
- 4）十地について学ぶ

② **参考資料**: 別添ファイルをご参照下さい。

・資料①: garchen_37practices(25)_in_seattle20170429.doc

ガルチェン・リンポチェの『三十七の菩薩行』ご法話＠シアトル(2017/4)より、

第二十五偈(布施波羅蜜)の英語通訳⇒日本語訳を試みたもの。　※ご活用は自己責任で！

・資料②: dorzin_37practices(25)_in_otsu20170322.doc

ドルズィン・リンポチェの『三十七の菩薩行』ご法話＠大津リトリート(2017/3)より、

第二十五偈(布施波羅蜜)の日本語通訳をテープ起こししたもの。

---

③ **原文** と **語義・コメント等**:

支分の広釈

支分を広釈するには、〔1〕布施の波羅蜜、2)戒の波羅蜜、3)忍の波羅蜜、4)精進の波羅蜜、5)静慮の波羅蜜、6)智恵(はんにゃ)の波羅蜜、の合計〕六つ〔がある。そ〕のうち、

布施の波羅蜜

第一:布施の波羅蜜(施しの完成)について、

摂義(ウッダーナ)は、**「過失・功徳の二種類を思惟することと、〔自〕体と区別と区別個々の自相(定義)と増長と清浄にすることと果と〔ーこれら〕七つの義により、施しの波羅蜜は包摂されている。」**というのです。

※語義: 以下、『仏教語大辞典』(石田瑞磨著:小学館)より引用。(一部、協会 HP の「翻訳者ノート」より引用)

○「支分」 ⇒全体を幾つかに分けた、その部分のこと。

○「広釈」 ⇒辞書には無し。「翻訳者ノート」(17)を参考にすると、『詳しく説明する』 というような意味だと思われる。

○「摂義(ウッダーナ)」 ⇒「翻訳者ノート」(16)によると・・・『摂義(རྒྱས། どむ)」は「サマリー」ということです。』・・・とのこと。

○「過失」 ⇒ とが。誤り。間違い。

○「功徳」 ⇒①仏の教えがもたらす福徳。②善をおさめること。現在、また未来に幸福をもたらすよい行い。神仏の果報をうけられるような善行。断食、祈祷、喜捨、造仏、写経の類。⑤神仏のめぐみ。ごりやく。善行を積んだ報い。

○「〔自〕体」 ⇒④本性。英訳では、『Definition』(定義)。

○「自相」 ⇒「翻訳者ノート」(12)によると・・・『「自相」(ངོ་བོ་ཉིད། つぇんに)というのは、サンスクリットの lakṣana の翻訳語で、漢訳では「相」と訳されてきましたが、英訳は普通 characteristic (性質)で、この方がわかりやすいです。』・・・とのこと。

○「増長」 ⇒辞書には無し。英訳では、『Increase』(増える・増やす(こと))。

○「清浄」 ⇒①清らかでけがれのないこと。また、そのさま。②煩悩や悪行がなく、心身の清らかなこと。

○「包摂」 ⇒辞書には無し。英訳では、『comprise』(～を含む、～から成る)。

※コメント等:

■第十二章では、前章で説かれた「発趣菩提心」、つまり「六波羅蜜」のうち、最初の「布施波羅蜜」が詳しく説かれていきます。

施しを具えていないことの過失と、具えていることの功徳

そのうち、第一を説明するなら、誰かが施しを具えていないなら、自己もまた常に貧乏により苦しむのです。ほとんどが餓鬼に生まれるし、もし〔その後で、〕人などに生まれたとしても、困窮し貧乏であって哀れなことになるのです。

そのようにまた『聖摂』に、「慳(ものおしみ)を持つ者は、餓鬼の処に生まれるであろう。もし人に生まれても、そのとき困窮するであろう。」と説かれています。

『律阿含』にもまた、シュローナコティーに対して餓鬼が回答した—「私たち、慳(ものおしみ)により慳貪を持つ者は、施しを少しも与えなかった。私たちは餓鬼の世間に至った。」と出ています。

また施しを具えていないなら、他者の利益もできないし、正覚をも得ないのです。そのようにまた、「施しを与える経験が無いものは〔受用すべき〕資財が無い。有情を摂取することが全くできないし、正覚を得ることはもちろんです。」と説かれています。

それから逆、〔すなわち〕施しを具えているなら、自己もまた生すべてにおいて〔受用すべき〕資財を持って、安楽を得るのです。

そのようにまた『聖摂』に「菩薩の施しにより、餓鬼の趣が絶たれる。貧窮と同じく煩悩すべてが断たれる。行ずるとき、無辺の広大な受用〔すべき資財〕が得られるであろう。」と説かれています。

『親友書簡』にもまた、「施しを如理に授けてください。あの世において、施しより他の最上の友はないのです。」と説かれています。

『入中論』にもまた、「この者たちすべては楽を欲するし、人々の楽は〔受用すべき〕資財が無くてはならない。資財もまた施しから生ずることを知って、牟尼は最初に施しの話をなさった。」と説かれています。

※語義：

○「施し」　⇒辞書には無し。「布施」だと載ってる。

①施すこと。これに財物を施す財施、教えを説く法施、種々の不安・恐怖を取り除く無畏施の三つがある。

○「具えて」　⇒辞書には無し。英訳では「practice」（修行する）となっている。

○「餓鬼」　⇒「翻訳者ノート」（47）をご参照のこと。

○「慳貪」　⇒けちで欲深いこと。物を惜しみ、むさぼること。

○「受用」　⇒（※）読み方は「じゅゆう」。①感覚器官が対象を受けとること。②受けて用いること。受持し活用すること。

○「摂取」　⇒仏が衆生を納め取って救うこと。

○「如理」　⇒（※）読み方は「にょり」。①真実不変の道理。真如の理法。②理に応ずること。英訳では「properly」となっている。

※コメント等：

◆「施しを具えていないことの過失と、具えていることの功徳」が、
ここではいくつもの聖経量(しょうぎょうりょう)（「翻訳者ノート 18」をご参照のこと）によって論証されています。

◆「施しを具えていないことの過失と、具えていることの功徳」について、
ドルズィン・リンポチェはリトリートでこう説いて下さいました。（参考：協会 HP_御法話_文書「六波羅蜜」。 下線部はまるさん）

==========

・・・そのようにケチであると、どういう結果を受けるのかといいますと、今生でも自分が楽しくないです。「ケチであるために食べたいものも食べられない」というふうに、自分自身も楽しくないです。また、心も穏やかになりません。自分がケチであるためにまわりに施すことができなくて、友人たちも楽しくありません。

また、今生だけではなく、来生に三悪趣(地獄・餓鬼・畜生)のなかでも、とくに「餓鬼」に堕ちるという果を受けます。
「餓鬼」は、何百、何千年という長い間、食べ物が得られない、着る物も得られない、飲む物も得られないという苦しみを味わいます。餓鬼の苦しみの原因はどこから来たのかといいますと、ケチという心から業を積んで、結果として餓鬼に生まれるのです。「餓鬼」に生まれる原因が、この「ケチ」です。たとえば、鏡を見てみると、その鏡のなかに私自身が映りますね。「ケチ」がありますと、今生でも苦しみ、来生に餓鬼に堕ちるのが見えるのです。

そのように「ケチ」になることによって、業をたくさん積み「餓鬼」に生まれ変わります。
「餓鬼」に生まれたとしても、前の生に善業を少し積んでいて、いつか「餓鬼」という業が尽きれば、再び人に生まれ変わります。
しかし、人に生まれ変わったとしても、経済的に問題があったり、勉強しても、あまり頭に入らないという人に生まれ変わったりします。
「何をやってもうまくいく」人もいますし、反対に、「いくらがんばっても全然うまくいかない」という人がいます。今、人に生まれていて、経済的に豊かである、もしくは貧しいという違いはどこから来るのかというと、豊かな人は前の生で「布施」をよく行ったのです。反対に、貧しい人は前生で「ケチ」であったために、せっかく人に生まれても経済的に貧しい、厳しい状態に生まれているのです。

これは人間に限ったことではなく、畜生、家畜といった動物たちにも同じことがいえます。家畜であろうとも、飼い主がよく面倒をみてくれて、環境に恵まれている動物もいます。たとえば犬でも、とてもいい飼い主に飼われている犬はいつも大切にされて、人のような生活を送っています。反対に、大変な状況にいる犬も勿論います。畜生の種類はたくさんありますが、その状況もまた違うのです。そのような違いは、「ケチであったかどうか」ということによります。前生で積んだ業によって、どこに生まれてもそういう結果を受けるのです。

日本は世界的にみても有名であり、経済的にも成功した国です。しかし、日本のなかでも経済的に貧しい、あるいは問題のあるような人たちもおられるでしょう。「日本全体を見れば豊かであるのに、どうして私だけこんな状態なのか。自分も同じようにお金持ちになりたいし、国も同じ条件で国民を守ってくれているはずなのに、どうして自分は貧しいのか」。これは前生で自分がケチであったために積んだ業のために、せっかくいい土地いい場所に生まれていても、お金がない状態になってしまうのです。

このように「布施をすることの利点」「布施をしないことの過失」そして「ケチであることの問題点」を、まずは知る必要があります。

私たちはみな等しく、苦しみを欲しません。しかし、輪廻には苦しみがあります。いろいろな苦しみがありますが、そういう苦しみを仏は知られて、「輪廻している衆生は、財産等がないと大変だ」と考えられ、「いま苦しみが生じているのも、ケチの結果である。その苦しみから脱するための原因を示さなければならない」と考えられました。そして仏は、布施の利益、布施をしなければならない理由を説かれたのです。

六波羅蜜という六つの教えのなかでも最初に布施を説かれたのは、我々は経済的な余裕がないと楽というものを達成できないからです。経済的余裕がなく、楽を達成できなければ、仏の境地を達成することもできません。そのため六波羅蜜のなかでも最初に「布施」が説かれているのです。

==========

また、施しを具えているなら、他者を利益することができます。施しにより摂取してから正法に立たせうるのです。
そのようにまた『〔聖〕摂経』に、「施しにより、苦しむ有情を円熟させる。」と説かれています。

※コメント等：

◆ここだけ、この前までに登場している他の聖経量（しょうぎょうりょう）とは、ちょっと趣が異なるように感じました。
この前までのは 後に説かれている「財施」のことを、ここのは「法施」のことを指しているのかと思われます。
英訳は以下のとおりでした。

Again, one who practices generosity can benefit others. With generosity, one can gather trainees and then establish them in the precious Dharma.
It is said: By the practice of generosity, one can fully mature sentient beings who are suffering.

また、施しを具えているなら、無上の正覚もまた成就しやすいのです。
そのようにまた『菩薩蔵経』に「施しを与える者に正覚は得難くない。」と説かれています。
『聖宝雲経』にもまた、「施すことは菩薩の正覚です。」と説かれています。
また、『勇猛長者所問経』には、施したことの功徳と施さなかったことの過患を混淆して説かれています。すなわち、「施したものそれは私のものです。家に置いたものそれは私のものではない。施したものそれは精髄があるのです。家に置いたものそれは精髄が無いのです。施したものそれは守護を求めない。家に置いたものそれは守護を求めるのです。施したものそれは怖れが無い。家に置いたものそれは怖れがあるのです。施したものそれは菩提の道を示す。家に置いたものそれは魔の方向を示すのです。施したものそれは大きな〔受用すべき〕資財になる。家に置いたものそれは大きな資財にならないのです。施したものそれは資財が尽きることを知らない。家に置いたものそれは尽きることになるのです。」などと説かれています。

※語義：

○「過患」 ⇒（※）読み方は「かげん」。 ①とがとわざわい。また、それがもたらす苦しみ。②あやまち。
○「精髄」 ⇒辞書には無し。英訳では『essence』（本質・特質・核心）

※コメント等：

◆ドルズィン・リンポチェはこう説いておられました。

==========

・・・経のなかに、「自分で集めたものは、自分のものではない。与えたものが、自分のものである」と説かれています。
たとえ千円なり一万円なりお金を集めても、死ぬときに持っていくことはできません。しかし、たとえ一円であれ百円であれ、施したもの、与えたもの、もしくは、身語意を使って、財産であれ何であれ自分が施したものは、来生にすべて残ります。これらの功徳はあなた自身のものです。与えたものは来生の幸せの福徳であり、自分にいつまでも残ると言われます。

まず小さな布施から始めて下さい。いきなり最初から大きな布施をしようとしても、結果として後悔をすることが得てしてあります。心の中に慈しみと愛を持ちながら布施しても、初めはやはり心の中にケチな思いがあります。それがわからず、一時的な想いで大きな布施をしてしまうと、後で後悔することになりかねません。ですので、まずは小さなところから始めて下さい。・・・

==========

施しの〔自〕体

施しの〔自〕体は、執着しない心により、保有するものを与えるのです。

そのようにまた『菩薩地』〔の「施品」〕に、「施しの自体は何かというと、〔資具と自らの身体を顧みない菩薩の〕無執着と倶に生じた思惟なるものと、それによる〔動機づけ・〕発起により、施されるべき事物を、施与するのです。」と説かれています。

※語義：

○「資具」 ⇒①日頃、使用する道具。資材・用具のたぐい。 ②生活のための用具。必需品。

○「思惟」 ⇒①考えをめぐらすこと。思いはからうこと。②対象を分別すること。③思うこと。考えること。

※コメント等：

◆最初の文は、英訳では以下のように表現されていました。（"fully"がある分、英訳のほうがきっぱりとした感じ？）

『The definition of generosity is the practice of giving fully without attachment.』

⇒布施の定義は、執着することなく完全に（十二分に）与えるという修行である。

◆ HELP !! 「無執着と倶に生じた思惟なるもの」とは何のことでしょうか？ チベット語原文はどうなってますでしょうか？

英訳では、『A mind co-emergent with nonattachment』となってました。

なので、〔資具と自らの身体を顧みない菩薩の〕無執着と倶に生じた "心"（あるいは "意図"とか？）なのかと思われますが。

◆ドルズィン・リンポチェはこう説いておられました。

==========

・・・「布施」とは一体何かといいますと、「自分のものと思っているものを与えること」です。

いつもは「自分」「私」というものを考えて、自分が受け取ることばかり考えています。10 円、100 円とか、食べ物や飲み物など「何か、自分の側の手に入るように」ということをいつも中心に考えています。けれども、ここでは「与える」ことを実践していきます。

なぜこれを実践するのでしょうか。自分が手に入れることを考えているとき、我執があります。吝嗇があります。執着があります。このようにして与えることができなくなっています。与えることができないことによって、自分自身が因と業（ごう）をつくっていきます。それらの対治（たいじ）として釈尊は「ふせ」を説かれました。「布施」とは「相手に与える」ことです。

それは、自分のもっている具体的なものだけではありません。飲み物や食べ物がなかったとしても、自分の身体と言葉と心（身語意しんごい）すべてで出来る限り人を手伝えば、それらすべてが「布施」になります。

布施の心は「慈心」（じしん）から生じてきます。布施を行なうときは、「相手に対して慈しみの心」をもって行う必要があります。・・・

==========

施しの区別

施しについて区別するなら、三つ。〔すなわち〕

1)財施と、

2)無畏施と、

3)法施です。

　そのうち、〔第一:〕財施により、他者の身体を堅固〔・安泰〕にするのです。

〔第二:〕無畏施により、他者の命を堅固〔・安泰〕にするのです。

〔第三:〕法施により、他者の心を堅固〔・安泰〕にするのです。

　また、初めの二つの施しにより、他者において今生の楽を成就するのです。法施により、〔他者において〕後生の楽を成就するのです。

※コメント等：

◆ドルズィン・リンポチェはこう説いておられました。

==========

「布施」は、以下の三つにまとめられます。

・**「財施」**(ざいせ)、財物を与える

・**「無畏施」**(むいせ)、恐怖をとりのぞく

・**「法施」**(ほうせ)、法を説く

==========

これら三つの詳細は、次回以降ご担当の方々にお任せ致します。

◆以下余談。

野田会長の「補正項」(2015/6/28 付)に、こんなお話が掲載されています。（※)以下、下線はまるさん

==========

・・・昨日、「日本にチベット仏教のお寺を建てる」という野望について話をした。

南アジアの仏教徒たちとつきあってわかったことは、日本のチベット仏教ファンはちょっと、あるいはかなり、変わっているということだ。

それはどういうことかというと、仏教の教えよりも瞑想の方法に関心があり、インドのヨガの変種としてチベット瞑想法を学ぼうとしているということだ。

しかし、チベット仏教の側から見ると、瞑想法(禅定波羅蜜)は手段であって目的ではない。目的は智慧(般若波羅蜜)だし、それを達成するためには、瞑想と同じくらいのエネルギーを布施や持戒などの日常生活の改善につぎ込まなければならない。

それなのに、日本のチベット仏教ファンの多くは、他を無視して(智慧さえ無視して)瞑想だけを取り出して学ぼうとする。それだと「アホ悟り」まっしぐらだ。・・・

==========

・・・・・。　自身への戒めとして有難く頂戴したいと思います。

また、「補正項」(2011/8/11 付)には、こんなお話が掲載されています。

==========

・・・8世紀の後半に、チベットでサムィエーの宗論というものがあった。

チベット王チソン・デツェンが主催して、インド仏教を導入すべきか中国仏教を導入すべきかを決定するために、インド僧カマラシーラ(先日引用していた『中観荘厳論』を書いたシャーンタラクシタの弟子)と、中国の禅僧摩訶衍(まかえん)が論争した。

2つの争点があった。

ひとつは、摩訶衍は「不思不観」、つまり無念無想になれば悟ると言ったが、カマラシーラは「個別観察」が必要だと主張した。

もうひとつは、摩訶衍は「般若波羅蜜さえあれば、布施などは不必要だ」と言ったが、カマラシーラは「布施は大乗仏教の根本であり、布施を捨てることは大乗仏教を捨てることだ」と主張した。・・・

==========

『帰依文』にはこうありますね。

ブッダとダルマと聖なるサンガとに　菩提を得るまで帰依したてまつる

わが積みきたる布施など福徳で　衆生のためにブッダになることを

「翻訳者ノート」(1)で野田会長曰く、

『・・・「**布施など福徳で**」は直訳なのですが、あるいはわかりにくいかもしれません。

布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の《六波羅蜜》ということを踏まえていて、「布施とその他の五波羅蜜」という意味です。

・・・「**ブッダになることを**」は、直訳すると「ブッダを達成しよう」ということです。伝統的な漢訳では「成仏する」と訳されます。

しかし、日本語では「成仏する」というと「死ぬ」ということを意味しそうな気がしますので、「ブッダになることを」という訳文にしました。

日本仏教は、自分がブッダになるということはあまり考えていないような気がするのですが、チベット仏教はきわめてはっきりと自分がブッダになることを目的にしています。

ただし、今生ではとうてい無理だと思うので、来生のいつかにブッダになることを目標に、今生を大切にして、六波羅蜜の修行をしようと考えているのです。』

・・・ということです。

以上